悪霊　第五部・砂上の王国

【登場人物】

伊集院満枝……H市の地主の娘
猪俣佐和子……満枝の元クラスメイト。東京で左翼活動に従事。党員となる
増田小百合……旧姓・安西。伊集院満枝の一年後輩
佳代……貧しい農家の娘。党のハウスキーパー
喜代美……女工。党に派遣されモスクワに留学
李麗姫（イヨヒ）……女性抗日パルチザン
小沼健吾……労働運動家。伊集院家の元小作人
三沢……党中央委員
大橋多喜蔵……党員。プロレタリア作家
増田喬……小百合の夫
悦子……家出した少女
五郎……不良少年
加藤寅二郎……脚本家
江戸川……探偵小説家
田中少佐……上海の謀略機関に属する陸軍将校
「清朝の王女」……田中少佐の「愛人」と噂される女性

昭和六年（一九三一）年十一月～昭和七年一月。東京市、満州、弘前市、上海

Ⅲ

翌日の夕方。

球撞（たまつ）き場の「エンゼル」は、男たちが吐き出す濛々（もうもう）たる煙で満ちていた。二台のビリヤードに、それぞれ和服にエプロン姿の女給がつき、得点を読み上げる。その周囲にはテーブルが並べられ、アメリカのギャング映画を真似たような与太者たちと、水商売ふうの化粧をした女たちが、酒を呑みながらトランプや花札に興じていた。

「五郎はいるか？」

ドアが開き、ダブルのスーツ姿の、かっぷくのいい男が入ってきた。

仲間とともに、店の奥でポーカーをやっていた五郎は、声の主に眼をやり、椅子を鳴らして立ち上がった。植木に頼まれ、小百合を殴った若い与太者である。

「おう、こっち来いや」

男は別のテーブルにつき、ウィスキーを注文する。五郎は、へい、と肩をすぼめ、その席まで歩いてきた。

「おい、五郎。何時まで待たせる気なんだ？」

運ばれてきたウィスキーをあおりながら、テーブルの脇で直立不動の五郎に眼もくれず、男は言った。

「へえ兄貴、それが……」

五郎は頭をかきながら、しどろもどろだった。
「あのアマ、なかなか言うことをきかねえんで……」
「そんなこたあ、俺の知ったこっちゃねえ」
兄貴と呼ばれた男は凄みをきかせた。
「おめえ、誰のおかげで、この浅草で商売ができると思ってるんだ？　それを忘れて、球撞き場なんぞで遊んでやがって……いい加減にしろい」
へえ、と五郎は縮み上がった。
男は、浅草一帯を仕切っている博徒一家の一員である。この界隈で商売をする者は、「みかじめ料」「用心棒代」など、さまざまな名目で、一家に上納金を払わねばならない。家出娘に春を売らせている五郎も例外ではなかった。否、やっている事が法に触れるだけに、一家の庇護がなければ、たちまち警察に通報される。
「今は、これだけしかねえんで……」
五郎はポケットから財布を取り出した。男は、その財布の中身をあらため、紙幣をすべて抜き取った。
「帰りの電車賃くらいは、残しておいてやら」
男は立ち上がり、三日だけ待ってやる。三日以内に残りを払わねえとどうなるか、わかってるだろな、と凄み、店を出ていった。
「畜生……」
五郎は歯ぎしりして、元いたテーブルに戻り、帰るぜ、と告げた。

なんだよ、まだ勝負はついちゃいねえぜ、と文句を言う仲間に、勝負したくても、からっけつだよ、と顔を顰(しか)めた。
「おめえ、最近、上玉をつかまえたとか言ってたじゃねえか。儲かって儲かってしょうがないんじゃねーのかよ」
仲間のひとりが言うと、五郎は肩をすくめて、それが、強情なアマでな、と呟いた。
「なんだ、客を取らねえって言ってるのか？　そんなアマ、殴っても言うこと聞かせろよ」
「もう殴ったさ……。それでも、がんとして言うこと聞きやがらねえ」
「そういう女には、とっておきの手があるぜ」
陰気な顔をした男がぽつりと呟くように言い、五郎は身を乗り出した。
「なんだい、そりゃ」
「モルヒネさ」
「モルヒネ？」
陰気な男は、カードをめくりながら、無表情に続けた。
「モルヒネ中毒にして、言うことをきかせるんだよ。ちゃんと働かねえとモルヒネはやらないぞってな。これがいちばん聞くぜ」

十数分後。
エンゼルのドアが開き、五郎が出てきた。俯き加減で、せかせかと駅のほうへと歩いていく。
同時に、エンゼルの向かいの喫茶店のドアが開き、姿を現したのは、黒っぽい服を着た加藤寅

次郎、探偵小説家の江戸川、そして洋装の増田小百合だった。
三人は、少し離れて五郎の後を追った。
「こういうのをね、尾行というのですよ」
五郎の背中から眼を話さず、江戸川は小百合に話しかけた。
「小説では書いたことがあるが……自分でやるのは初めてだ」
小百合は、はあ、と曖昧に頷き、加藤は肩をすくめた。
その三人から少し離れた雑踏に、釣り鐘帽を目深にかぶった洋装の女が立っていた。歩き始めた三人を、女もまた追い始めた。
猪俣佐和子だった。
佐和子はすでに、スワンを辞めていた。ああいう騒ぎを起こされた以上、勤め続けることはできない。別の店を探さなければならないが、その前にしておかねばならぬことがあった。
小百合は、自分を脅した与太者が、佐和子に頼まれたものと思いこんでいる。この誤解だけはなんとしても解かねばならない。さらに、小百合がどの程度、自分のことを知っているのか、それも探らねばならない。
どうすればそれが可能なのか、算段がついたわけではなかった。算段がつかぬまま、佐和子は朝から、小百合が寄宿する加藤寅次郎の家を見張っていた。果たして、見知らぬ紳士が加藤の家を訪れ、なかに入っていったかと思うと、やがて、小百合を伴って出てきた。そのまま駅に向かう二人を佐和子は追い、気づかれぬよう注意を払いながら、浅草までついてきたのである。

話は前日の夜に溯る。
日が暮れるのを待って、江戸川は、小百合をカフェに待たせ、加藤とともにエンゼルに行った。果たして、五郎という与太者は来ていなかった。カフェに戻った江戸川は、エンゼルの向かいにおあつらえの喫茶店がある。そこで、一日張り込みましょう、と提案した。張り込んでどうするんだ、と訊ねる加藤に、江戸川は、後を尾けるのさ、と答えた。奴のねぐらを突き止め、その家出した娘さんが本当に奴のところにいるかどうかを確かめるんだ。確かめてどうするんだ、踏み込むのか、と問う加藤に、自分たちで踏み込むか、警察に任せるかは、その時、考えりゃいい、と江戸川は笑う。危なくないかね、と懸念する加藤だが、江戸川は、じゃあ、君につき合ってもらわなくてもいい、僕だけでやる、と譲らない。
結局、江戸川は小百合とともに、翌日の朝からエンゼルの向かいの喫茶店に張り込んだ。
「満州では、日本軍が破竹の勢いですな」
新聞を広げながら、江戸川が言った。
「このぶんだと、来年早々には満州全土を占領しそうな勢いだ……」
「はあ……」
小百合の生返事に、江戸川は溜息をついた。
「そんなに気張っていたら、身が持ちませんよ。奴さん、いつ現れるか分かりませんからね」
小百合は、すみません、と頷いたが、窓から眼を外すことができなかった。五郎の顔を知っているのは、小百合だけなのだ。視線は外さぬまま、こう問うた。
「戦争は、何時になったら終わるのでしょう」

「やはり、ご主人のことが心配ですか？」
「ええ……」
「まあ、これは噂だが……」
江戸川は声を潜めた。
「満州に新しい国を造ろうという動きがあるんだそうで……」
「新しい国、ですか？」
「ええ。それが本当だとすると、結構長引くかもしれませんなあ」
さすがに小百合は、一瞬、眼差しを江戸川に向け、訊ねた。
「江戸川さんは……軍のことも、お詳しいのですか？」
「いえいえ、とある会合で噂話を耳にしただけです。私は、探偵小説家のくせに、新聞に出てる犯罪事件にも興味のない人間でしてね」
「そうなんですの？」
「ただ、新しく国を造ろうと動いてる軍人がいることに関心を持っただけです」
「と言いますと？」
「私は昔から、パノラマが好きなんです」
「パノラマ？」
パノラマとは、円筒形の建物の内側の壁に一続きの風景を描き、あたかも別世界にいるような錯覚を起こさせる施設のことである。西洋で十八世紀末に発明された。日本では日清戦争や日露戦争での有名な戦いを再現したパノラマが人気を博し、一時期大流行したが、小百合が生まれる

事にはすでに人気は下火になっており、実際に見たことはない。
「パノラマを発明した男の苦心談を読んだことがありますが、彼は、丸く囲んだ建物のなかに、思うがままの宇宙を作ってみたいと思ったんだそうですな。自分の心の中にだけ存在する世界。それを実際に作り上げたいという気持ちは、私にもわからんでもない。小説もまた、どこにもない世界を自分の頭のなかで創り出し、それを紙に書いて人に伝えるものですからね」
「でも……」
小百合は、話を元に戻したかった。探偵小説とパノラマの比較などより、夫の身が案じられる。
「実際に国を造るとなると、パノラマみたいに思うようにはいかないのでは？」
「そりゃそうです」
江戸川は頷いた。
「ただね、どこにも存在しなかった国を、新たに地上に打ち立てようというのは、人間という動物が抱えている厄介な欲望だと思うんですよ。たとえば、あんた、ユートピアという言葉を知っていますか？」
「歴史の授業で、そういう御本があることは習いましたけれど……」
「あれはね、十六世紀イギリスの法官だったトオマス・モアが書いた本の題名で、ユートピアというのは、どこにもない国、という意味です。すなわち、モアは自分が理想とする国の姿を描いたんですな。どんな国だと思います？」
「さあ……」
「それがね、アカが理想として掲げる社会にそっくりなんですよ」

「アカ？」
それが社会主義者を意味していると気づくのに、少し時間がかかった。江戸川は言った。
「モアが理想とした社会では、みんな同じ清潔な衣装を着て、私有財産はなく、必要なものは共同倉庫に管理され、公平に分配されるわけです。すなわち、貧富の差のない社会です」
確かに似ている……。社会主義についての知識に乏しい小百合でさえ、それは理解できた。
「ただし、その社会は平等ではあるが、そのかわり均質であることが求められる。住民はみな同じ服を着て、労働時間も食事の時間も、寝る時間まで細かく定められている。そういう生活になじめない者は奴隷とされる……ある意味、恐ろしい社会でしょう？」
ふと、小百合はかつて、伊集院満枝から借りた、支那の革命運動家の文書を思い出した。そこでは、平等社会を実現させるために、暴力でもって恐怖状態を創り出すことの必要性が説かれていた……。
「私も何年か前、すべての欲望が解放される人工楽園づくりに資産を傾ける男の小説を書いたことがありますがね。ただのパノラマじゃ満足できず、本当に理想の国を造るという連中は、軍人であれ社会主義者であれ、私に言わせれば一種のパラノイアですな」
「そうですわね」
小百合は、窓の外を見やりながら呟くように言った。
「しかも、理想の国を造るために暴力を振るうというのは……」
その言葉に、江戸川が虚を衝かれた表情を浮かべた時、おう、まだいるのか、と仕事を終えた加藤寅次郎が店に入ってきた。「やっぱり、お前さんたち二人だけじゃ心配で、来ちまったよ」

と加藤は笑った。
それからしばらく後、小百合はとうとう、五郎がエンゼルに入っていくのを見た。そして、五郎がなにやらせわしなく店を出るのを確かめ、「尾行」が始まったのだ。

――これで駄目だったら、夜逃げしかねえ……。
五郎は口のなかで呟いた。
悦子と出会ったのは十日前だ。浅草寺の雷門の前で、布袋を抱えて立っていた悦子は、垢じみたシャツにスカート、埃にまみれて乱れた髪、見るからに家出娘の風体で不安げに周囲を見回していた。声をかけ、蕎麦を奢ってやると、夢中になってかきこむ。腹いっぱいになって安堵の表情を浮かべる悦子から、言葉巧みに事情を聞きだした。
弘前の不良少年が、浅草で働いている姉を頼って出奔したのを追って来たと聞き、わかった、俺が探してやるよ、それまで俺のアパートにいな、と誘うと、簡単に頷いた。
風呂に入らせ、服や髪を調えさせると、悦子はなかなか愛らしく、しかも、おとなびた豊満なからだつきをしていた。磨けば上玉になる。そう確信した五郎は、最初の数日、親切で頼りがいのあるおにいちゃんとして悦子と接した。うまいものを食わせてやり、シネマを見せ、遊園地で遊ばせた。悦子の心が、弘前の不良少年から自分に傾いてきた感触を得た上で、悦子に接吻した。悦子は、素直に接吻に応えた。
五郎が初めて悦子を抱いた時、彼女は抗わなかった。幼く硬い蕾を開くには到らなかったが、それは計算済みだった。初物は高く売れる。大事に取っておかねばならない。

申し訳なさそうな悦子に、五郎は唇での奉仕を要求し、悦子は応じた。悦子は先天的に、男を喜ばせる術を心得ているらしい。巧みな舌使いに夢中になりつつ、弘前の不良少年にも同じ行為をしていたのだろうか、と想像した。それならば、他の男に同じ行為をして稼ぐよう命じても従うのではないか。

その後、五郎がしょんぼりとした顔を装い、やむを得ない事情で大金が必要になった。払えなければ大変な目にあう、と切り出し、悦子が、自分にできることがあったら何でもする、と言ったとき、目論見どおりに事が運びそうだと内心でほくそ笑んだ。

だが昨夜、なじみの客を待合に連れて行き、悦子と二人きりにしておいてアパートで待っていると、悦子が暗い顔で帰ってきた。金は？　と聞くと、無言で首を振るばかりであった。

不安を覚え、すぐに待合に向かった。客は、股間を両手で抑えてのたうちまわっていた。悦子はかたくなに唇での奉仕を拒否し、強要しようとすると、膝で睾丸を蹴り上げて逃げたのだ。

平謝りに謝ってアパートに帰り、悦子を難詰した。かたくなに返事をしない悦子に業を煮やし、胸倉を摑んでゆすぶった。すると悦子は、今度は五郎の股間を蹴り上げた。

すさまじい痛みだった。やっと立ち上がれるようになるまで、数十分を要した。やっと回復した五郎は、顔が腫れあがるまで悦子を殴りつけた。

翌朝、部屋の片隅でうずくまったまま動こうとしない悦子に優しい声をかけた。暴力の後で、優しさを見せることもまた、女をたらしこむ術として有効なはずだ。ところが悦子は、五郎の顔につばをはきかけた。逆上した五郎は、今度は失神するまで殴りつけ、手足を縛ってアパートを飛び出した。

とにかく、悦子に働かせるしかない。悦子を働かせて稼がねば、飯の食いあげだ。上納金も払えない。モルヒネ漬けにしても、従わせるしかないのだ。

この当時、麻薬といえば阿片である。

支那や満州において、日本軍や官憲が密かに阿片密売に携わり、巨額の利益を得ていたが、国内では医薬用以外に使うことは厳しく統制されていた。そのかわり、阿片から精製されるモルヒネは、鎮痛剤として比較的簡単に入手できる。

五郎は、仲間から金を借り、東武線に乗って亀戸へと向かった。そこに、処方箋なしにモルヒネを売る薬局があると聞いたのだ。亀戸駅で降り、繁華街を抜け、薄暗い横町に入る。果たして、薄汚れた看板を掲げた店が、寂しく明かりを灯していた。

ガラス戸を開けて入ると、まだ若い店主が、背を丸めて座っている。

「モルヒネ、くれ」

ぶっきらぼうに言った。

「いくつだい？」

「これで買えるだけ、くれ」

借りたばかりの札束をポケットから抜き出し、五郎は怒鳴った。

「注射器もだ」

「処方箋は持ってるのかい？」

「ふざけるなよ！」

五郎は店主の胸ぐらを掴んだ。
「ここじゃ、処方箋なしでモルヒネだって何だって売るんだろう。そう聞いたから、わざわざ来てやったんだ。つべこべ言わず、さっさと出せ」
「お、おい。乱暴はよせ……」
「うるせえ！　おらぁな、平川組の遠藤兄貴から杯を受けてる者なんだ。逆らうと、どんな目にあうか、わかってるのか？」
「あんた……」
店主は急に薄気味悪く笑った。
「平川組って、今言ったな」
「そうよ。それがどうしたんでぇ」
「どうせ、モルヒネを薬として使うわけじゃないんだろう？」
「なにぃ？」
「阿片はいらんか？」
「阿片？」
「おう、ぼろい儲け話があるんだが、乗らねえか？」
「なんだと？」
店主を締め上げる五郎の手が緩んだ。店主は、その手を振り払い、ああ苦しかった、と喉をさすりながら言った。
「俺ぁ、去年まで兵隊で満州に行っててよ」

「満州？」
「ああ。あそこじゃ、関東軍が阿片を密売していてな、そのおこぼれが、ひょんなことから俺の上官の軍曹殿の手に入ったわけだ」
「それで？」
「除隊になった後、その軍曹殿と組んで秘かに阿片を持ち帰ったんだ。いずれそいつで儲けようって話をしていたんだが、その軍曹殿、酒に酔って喧嘩に巻き込まれ、おっ死んじまった。まあ、俺が独り占めしたみてえなもんだが、はて、阿片で儲けるったって何をどうすればいいか、皆目わからねえ。あんた、平川組の者なら、そのあたりの商売のつてはあるだろ？　俺だって、いつまでもこんなしみったれた薬屋稼業で終わりたかぁねえ。だからよ……」
「ちょっと待った」
五郎は店主を制した。
「まずは、その阿片を見せな。話はそれからだ」
「ここには、ねえよ」
「どこかに隠してやがるのか。そこに案内しな」
「そりゃ、できねえよ。実際に俺と組むと約束してくれねえと、そうおいそれとお宝のありかを教えるわけにゃいかねえぜ」
「馬鹿野郎、本当に阿片を持ってるかどうか確かめもしねえで、今日会ったばかりのてめえなんかと組めるかい」
「しょうがねえなあ……ちょっと待ってろ」

店主はいったん奥に引っ込み、しばらくして薄汚い小瓶を手に戻ってきた。一センチほどの厚さの白い粉末が入ってる。
「うちに置いてあるのは、これだけだ。やるから、本物かどうか、確かめてみろ」

「おい、どうする？」
寅次郎はそっと江戸川に耳打ちした。
「このまま歩くと玉ノ井だぞ」
阿片の小瓶を懐に薬局を出た五郎は、そのまま亀戸駅で電車に乗り、玉ノ井駅で降りた。玉ノ井は、有名な私娼窟である。加藤と江戸川はともかく、小百合のような堅気の身だしなみをした女性が夜中に歩く場所ではない。
「そうさな、ここは、君と僕とでやるか」
江戸川は頷き、小百合に言った。
「あんたは、駅の待合室で待っていなさい」
小百合は、はい、と小さく答えて足を止め、物陰に隠れながら、五郎の後を追っていく二人を見つめ、その姿が消えるとともに踵を返して歩き出した。
駅に戻り、狭い待合室のベンチに腰をおろし、小さく溜息をついた。
……いったい、何をやっているのだろう。
慣れぬ踵の高い婦人靴に、足が痛かった。すっかり興奮した江戸川に引きずられるように、探偵のまねごとにつき合わされた。悦子を助けるためだから、と不満はなかったが、薄暗い見知らぬ駅の待合室に独り座っていると、不安がこみあげてくる。
電車が到着し、若い男たちが五人ばかり降りてきた。仕事帰りの工員だろうか。口々にわめいている言葉から、これから女を買いにいくのだということが察せられた。
ひょっとしたら、悦子はこの街で、客を取らされているのではないか。思わず立ち上がり、待合室の窓から外を見た。
その時、外の電柱の傍らに佇んで駅舎を見つめていた一人の女が、びくりとしたように柱の陰に身を隠した。

玉ノ井の娼館は、一見。ふつうの家と変わらない。
軒の低い民家風の家がつらなる中、狭い露地を歩いていた五郎は、ある家の前で立ち止まった。格子戸の前に、老婆が独り床几に腰を下ろしている。
「まち子はいるかい？」
いるよ、と老婆は頷き、五郎は手慣れたふうに、なかへと入っていった。やがて、暗かった二階の窓に電気が点った。
「まさか、あそこにいるんじゃないだろうね」
曲がり角の陰から五郎の家をうかがいつつ、加藤が江戸川に言った。五郎は、家出娘に客を取らせて喰っている男である。悦子を、あの家で働かせていないとも限らない。
「そうさな……どうかね？」

江戸川が何か思いついたように言った。
「なんだ？」
「あの男が出てきたら、ぼくは彼を追う。君は、あの家に行って、その娘さんが働いてるかどうか、確かめてくれないか」
「ぼくは、娘さんの顔は知らんぜ」
「そこを、うまく聞き出してくれよ」
江戸川は頭をかいた。
「ぼくは、どうも商売女と喋るのが苦手でね……君はそういうのには慣れてるだろう？」
「いや、それは……」
おい。不意に背後から、重い声音が響いた。振り返ると、三人の男たちが江戸川と加藤を囲むようにして立っている。いずれも凶暴そうな、見るからにその筋の男たちだ。
「てめえら、何やってる？」
「いや……別に何も」
「うろうろと、嗅ぎまわりやがって……新聞記者じゃねえだろうな」
「いや、ぼくらはただ……」
「ちょっと、こっちに来い。面貸せ」
江戸川と加藤は、男たちに引きずられ、夜の闇に消えた。

「これは……本物だね」

まち子は、小瓶の蓋を開け、なかに入っていた白い粉を鼻先で嗅いでから言った。
「阿片なんて……あんた、どうやって手に入れたのさ」
「それは言えねえよ」
五郎は、まち子の手から小瓶を奪い取り、ズボンのポケットに突っ込んだ。
狭い四畳半の隅に、茶碗と急須が置かれた小さなちゃぶ台と、色の剝げた鏡台、あとは無造作に布団を敷いただけの殺風景な部屋で、二人は服をつけたまま、向かい合っていた。
まち子は、五郎とは古い馴染みである。二人とも、日本名を名乗っているが、生まれは朝鮮半島だった。故郷で食い詰め、活路を求めて日本に渡ってきた朝鮮人の子どもである。三年前、女を買いに玉ノ井にやってきた五郎は、たまたま買ったまち子が同じ朝鮮出身であることを知った。
まち子は、八年前の関東大震災の折り、朝鮮人が井戸に毒を投げ込んだという流言飛語に惑わされた日本人によって、両親を殺された。以来、苦界に身を沈めなければならなくなったが、生来、他人を恨むことが少ない性質なのだろうか、心にねじけたところがなく、話をかわしていると、不思議と心が安らぐ。十三歳で家出して以来、与太者として生きてきた五郎は、まち子を姉のように慕い、五つ年上のまち子もまた、五郎を弟のようにかわいがった。
まち子は以前、満州で働いていたことがあった。一度か二度、阿片を吸ったこともあるという。意志の強い彼女は、中毒になる前に吸引をやめた。その話を聞いていた五郎は、亀戸の薬局店主からもらった阿片が本物であるかどうか、彼女に確かめさせたかったのである。
「いや、ありがとうな」
五郎は立ち上がった。まち子は、驚いて問うた。

「遊んでいかないのかい？」
「ちょっと切羽詰まっててな」
五郎は、恥じらったように頬をかいた。
「ごめんな。今度、ゆっくりしてくからよ」
「あんた、まさか……」
まち子は眉根を顰めて言った。
「その阿片で……何か危ない橋を渡るつもりじゃないだろうね？」
「馬鹿、言え」
「心配なんだよ……」
まち子は立ち上がり、五郎の胸に顔を埋めた。
「ねえ、もう足を洗ったら……。危ない橋を渡らなくても、あたしの稼ぎであんた一人くらいは喰わせられるんだから」
「冗談じゃねえよ」
五郎は、町子の頬に両手をあてがい、その眼を見つめた。
「いずれ、大金をつかんだら、お前を身請けしてやる……所帯を持つのは、その後だ」

沈んだ顔で座っていた小百合は、待合室に入ってきた五郎の姿に、すぐさま顔を背けた。五郎は、小百合に気づいたふうもなく、切符売り場で運賃を払い、改札を抜けてホームへ向かった。
五郎の姿が消えるのを確かめ、小百合は待合室を見回した。五郎を尾けているはずの加藤と江

戸川は姿を見せない。外を覗いてみたが、二人の姿はない。まさか、はぐれてしまったのか。
……どうしよう。
電車の音が響いてきた。五郎が立っている浅草方面行きのホームに滑り込んでくる。
小百合は咄嗟に決心した。
「浅草まで」
切符を買い、五郎に気づかれぬよう、そっとホームに出た。やがて電車が入ってきた。五郎が乗り込むのを確かめ、隣の車両に入った。
ドアが閉まり、電車はごとごとと動き出した。
もう、迷っている暇はない。とにかく、小百合独りで後を尾けるしかないのだ。